

山梨県の衣生活研究ノート(1)

明治から昭和初頭の東八代郡の衣生活について

斉 藤 秀 子・石 山 正 泰

山梨県立女子短大 生活科学科

The Folkways of Clothing in Yamanashi Prefecture (1)

Clothing in Higashiyatsushiro-gun from the Meiji to the early Showa Period

Hideko SAITO, Masayasu ISHIYAMA

Yamanashi Women's Junior College

Key words: Materials for Folklore(民俗資料), Folkways of Clothing(衣生活習俗), Working Clothes(仕事着), Everyday Clothes(日常着), Yamanashi Prefecture(山梨県)

1 はじめに

本学では家政科から生活科学科へ名称変更するに当たり、衣生活分野、すなわち、被服関係の科目も「衣生活論」や「衣生活演習」など、衣生活を対象とした科目へと変更された。いずれの科目にしても、従来の被服学にプラスして、現代衣生活の理解に力点が置かれることとなった。現在、「衣生活論」の教科書で取り上げられる内容は、衣生活の歴史や染色文化、被服の機能、被服の構成、被服材料、被服整理などであり、学生がこれらの諸問題を身近な問題として認識できるかが問題となる。このような中で、衣生活、特に衣生活の歴史を理解するため、郷土の衣生活を取り上げる方法がある。郷土の衣生活の調査方法としては、郷土に残された衣服類の調査が考えられるが、今回は、手始めに実物調査の基礎ともなる文献による調査を実施した。

衣生活に関する文献としては第1に、山梨県内の市町村誌など郷土の民俗資料があげられる。山梨県内の市町村誌では、「衣、食、住」の中の「衣生活」として、各市町村における、主に明治時代

から昭和にいたる衣生活の様子が、記述または若干の図または写真として記録されている。ただし、これらの市町村誌を山梨県の衣生活に関する文献資料として見る時、記述の年代や内容、すなわち記述の方法に各市町村間で多少の差異があること、また、市町村別の資料であるため、各市町村間の衣生活の比較や山梨県全体の衣生活の様子を観察することが困難であり、山梨県の衣生活の全貌をとらえるにはいたらないという問題点がある。衣生活に関する資料として、第2に民俗資料調査報告書がある。山梨県全域を調査対象とした文献資料を見ると、「山梨県民俗資料調査報告書」(1964年、山梨県教育委員会)¹⁾に仕事着、染色について、「山梨県民俗地図—山梨県民俗文化財分布調査報告書—」(1985年、山梨県教育委員会)²⁾に仕事着、雨具、被服材料や染色方法の山梨県下での分布について、「山梨県総合郷土研究」(1978年、山梨県女子師範学校)³⁾に衣服について記録されているが、このような山梨県全域を対象とした調査報告書はきわめて少ない。また、衣生活の記録内容も各地域についてはかなり限定されたものとなっているきらいがある。さらに、県内各地域を対象とした民俗調査報告書について見ると、「右左

口の民俗」(1984年、東洋大学民俗研究会)⁴⁾をはじめとして数多くの調査報告書に、衣生活についての記録が残されている。これらも市町村誌と同様、山梨県の衣生活を知る上で貴重な記録である。

このように各地域別の詳細な調査報告では、県下全域の衣生活の様子を理解に、全域の調査では詳細な記録に不十分な点があると考えられる。また、これらの資料には被服の名称は記述されているが、その形状等の詳しい記述がないため、学生がこれらの資料から当時の衣生活を理解することは困難である。そこで、本ノートでは、本学の衣生活教育に資することを目的とし、山梨県の全域および各地域の民俗関係文献資料による明治期から昭和初頭の山梨県の衣生活についての調査を行った。ここでは、文献調査の方法および東八代郡の調査結果について報告する。

2 研究方法

(1) 調査資料

山梨県の郷土に関する文献資料の内、衣生活について記述してある資料として、県内各市町村の教育委員会で編集される市町村誌があげられる。県内の市町村誌は県下64市町村中55市町村で発行されている。残る9市町村中、平成10年度までに発行予定が7市町村であり、平成10年度までには、発行未定である道志村、足和田村を除き、ほぼ全市町村の市町村誌が出揃うこととなる。本ノートでは、東八代郡の町村の内、衣生活に関する記述のない境川村を除く、石和町⁵⁾、御坂町⁶⁾、一宮町⁷⁾、中道町⁸⁾、芦川村⁹⁾、豊富村¹⁰⁾の計6町村誌を対象とした。

(2) 調査年代および内容

調査の年代は市町村誌で主に記述されている明治時代から昭和初期、多くは第二次世界大戦前までを対象とした。調査の内容は、冠婚葬祭用の礼装以外の、主に成人男女の、仕事用の服装である仕事着、日常の服装である日常着、および外出用の服装である外出着とした。これは、仕事着、日常着、外出着の記述が、服装についてかぶり物から履物にいたるまで詳しく記述してあること、特に仕事着については山梨県以外の文献調査も行なわれており全国的な比較研究が可能なことによ

る。

(3) 調査方法

前述のとおり、各市町村誌の記述は、その年代や、内容がさまざまであるため、その地域の衣生活の理解、各市町村間の衣生活の比較は容易ではない。そこで、各市町村の衣生活を整理するため表1のような調査票を作成した。調査項目の選定にあっては、あらかじめ各市町村誌の衣生活に関する記述を概観し、その記述内容をもれなく記入できるよう配慮した。調査項目および、記入内容は次のとおりである。

1) 市町村名

調査対象の市町村名、地区名

2) 時代

資料に記述してある時代名称

3) 着用目的

被服の着用目的としてその服装の名称、仕事着(作業着を含む)、日常着(平常着、普段着を含む)、外出着、または、職業のための服装の場合はその職業

4) 着用者

服装を着用した男、女等

5) 季節・気候

着用時の季節、気候

6) 被服の名称

着用目的に応じた服装を構成するかぶり物、履物以外の上衣、下衣、表着、下着を含む着装するものすべて

7) 雨具・防寒具

かぶり物、履物以外の雨時、または防寒を必要とする時着装するもの

8) 袖

被服の名称として記述されていない袖の形状

9) 被服材料

被服の材料名、色、柄

10) 供給

被服材料および被服の供給方法

11) かぶり物

頭部に着装するもの

12) 履物

足袋を含む足部に着装するもの

表1 石和町の仕事着・平常着

市町村名	石和町												
時代	大正初期ごろまで			昭和10年ころ	大正時代以前				明治・大正		太平洋戦争中		
着用目的	仕事着(野良着)		仕事着・平常着	仕事着・平常着	平常着				役人・男子教師・巡査 軍人 中等以上の学生・生徒		平常着		
着用者	男	女	女	男		女			男	女	男女児	男子学生	女子学生
季節・気候				冬	夏	冬	夏						
被服の名称	ツツッポ(筒袖着物) ・ハンテン(裃天) フンゴミ(踏込) ハラカケ(腹掛) 巻脚絆	着物 コシマキ(腰巻) 脚絆 手甲・腕抜き タスキ	カラサン (モンベの原型)	着物 (綿入れ) ふんどし	着物 (単衣) ふんどし	着物 (綿入れ) 腰巻 前掛	着物 (単衣) 腰巻 前掛	洋服	国民服 ゲートル	モンベ カラサン	桑皮繊維 の服・裃 天 モンベ	白開襟シャ ツ 作業ズボン ゲートル	ヘチマカ ラーのツ ブース
雨具・防寒具	胴着(綿入れハンテ ン)												
袖													
被服材料				木綿・絹							服は桑皮 繊維で作 成		父 母 の 着 物、夏は上 のみ白生地 次第に桑の 木皮を使用
供給				家織り (大正時代子どもを中心に紺の着物が普 及)						着物を解 いて作成	裃天は古 着で作成		
かぶり物	手拭(鉢巻き・ほほか ぶり) スゲ笠(雨天時)	手拭(かぶる) スゲ笠(雨天時)											
履物	ワラジ・田作業では 裸足有								地下足袋				
髪型										防空頭巾			
特徴・ 変化の様子	フンゴミ→モモヒキ →ズボン ツツッポ・ハンテン →シャツ(野良シャ ツ) ワラジ→地下足袋 スゲ笠→戦後麦藁帽 子	着物は端折って紐で 結ぶ スゲ笠→麦藁帽子	カラサンは長野県か ら入り、峡北地方に 早く広まり、次第に 全県下に普及 野良着の改良・洋装 化進む	大正時代以降 ふんどし→さるま た(猿股) 綿入れは「スノコ」「ノノコ」「ヌノコ」 と呼ばれる この外に県内・石和の防寒具として 「ちゃんちゃんこ」「おぶい裃天」があっ た		大正時代以降 ズロース着用		昭和に入り成人男子 の洋服(背広)が一般 的となる 昭和4年、女学生(山 梨英和学院)セー ラー服着用	戦況が厳しくなると男 女とも住所、氏名、血液 型を記入した白い布を 胸につけた 雑のう、防空頭巾を所持 した 石和中学校 PTA「うかひの郷いさわ」より				
洋装化												戦後洋服一辺倒に変化	
図表の有無													

表2 御坂町の仕事着・平常着・外出着

市町村名	御坂町											
時代	明治時代			明治時代				明治末から大正		新時代(昭和)		
着用目的	仕事着(山村部)			平常着				外出着		仕事着		平常着
着用者	男		女	男		女		男	女	男	女	
季節・気候	冬	夏		冬	夏	冬	夏					
被服の名称	衿・綿入れ腰切半纏 フンゴミ(モモヒキ) 腹掛け	シャツ フンゴミ(モモヒキ) 腹掛け	襦袢(鯉袖口) 筒袖 お腰 カラサン 手甲 たすき	綿入れ長着半纏 へこオビ・角帯	単衣長着 へこオビ・角帯	綿入れ長着半纏 腹袷帯	単衣長着 腹袷帯	袷着物 長羽織 ボタン付き袴 シャツ 白縮緬・白絹の帯	二枚重ねの着物 腹合帯 半襟つき襦袢 (羽織なしの帯付き姿)	半纏 ももひき	袴纏 カラサン・モンベ たすきはばき 前掛け	チャンチャンコ* みちゆき(ボロカクシ)* ゆかた* 丹前*
雨具・防寒具	蓑(雨具)											
袖				襦袢の袖はすっぽん(鯉袖口) 筒袖								
被服材料	腹掛けは紺木綿		襦袢—白色の素木綿 筒袖—紺木綿 カラサン—紺 お腰—フランネル	衣服は素木綿・男女共織色木綿といい紺色系統で暗い縞模様				絹 大正時代、上流では綾織り紺・小紋				
供給	綿糸を購入し「紺屋(こうや)」で染めさせ、仕事着はすべて自家製の家織			裏地、下着類もすべて家織				家織 大正時代—自給自足→衣類の購入による消費生活 養蚕が盛んになると絹を自家用外出着とした				
かぶり物	ほうかむり・麦藁帽子		ほうかむり・麦藁帽子					鳥打ち帽子・中折帽				
履物	紺足袋、草履 藁靴(降雪時)		紺足袋、草履 藁靴(降雪時)					白足袋				
髪型												
特徴・変化の様子	大正時代—シャツ、コールテン 乗馬ズボン式→現代—シャツ、ズボン、地下足袋		日華事変の頃から、時局の要請もあり作業服(ツービース)となる					春秋には本セル単衣の着物、羽織が、夏にはろの羽織がみられるようになる				
洋装化								大正時代—児童の多くは洋服				
図表の有無	腹掛け・半纏・藁靴											

注) *印は単品被服の場合

- 13) 髪型
- 14) 特徴・変化の様子
服装や着装の特徴やその被服の変化等
- 15) 洋装化
洋服の着用状況
- 16) 図表の有無
写真、裁断図等ある場合の被服名

この調査票を作成するにあたり留意した点は、いつ、どこで、だれが、どのような目的で、どのような服装をしたか、そして、その被服をどのように調達したかという衣生活の在り方を明確にすることである。民俗調査の方法には、下着を除き着装する表着のみを対象とした調査や、四肢、軀幹部を被覆する服装構成ではなく、被服のみを対象とする場合も少なくない。したがって、各市町村誌の記述も表着のみを記述してある場合もあると考えられるが、調査表には記述してある服装に含まれるすべての被服を記入することとした。また、資料の記述してある被服名のみでその被服の形状が明らかではない場合は、著者の推測した被服名を付記した。一部、服装構成の記述がなく被服名のみ記述されている場合も調査票に被服名を記入した。被服名の記入は、資料に記述してあるとおりの漢字、かな、カタカナとし、年代や着用目的の明確でない履物やかぶり物は省いた。

3 明治時代から昭和初期における東八代郡の衣生活

(1) 仕事着

東八代郡の各町村の仕事着、日常着、外出着の調査結果を表1から表6に示した。男子の仕事着では長着とフンゴミ、袴纏とフンゴミ、長着または襦袢と股引、長着と股引、ハンギモノとカラサン、襦袢と股引、尻切れ袴纏と股引がみられ、東八代郡の中でも地域により多少異なっていた。一宮町と八代町では長着または襦袢と股引、長着と股引の服装であり、八代町の記述にあるように長着の裾を端折って仕事着とした。この服装は長着と股引を着用しており、一部式から変形した二部式(長衣+股引)である。これに対し他の地域では、腰丈の襦袢やハンギモンあるいは腰切り半天・フンゴミや股引またはカラサンが用いられ、

完全な上下二部式(短衣+フンゴミ、股引、カラサン)の仕事着が定着していたとみられる。いずれの地域でも、これら二部式の上衣であるハンテンやハンギモン、端折った長着の代わりとして、シャツの着用が大正から昭和初期に行なわれた。

二部式服装の付属として用いられたいわゆる被服類についてみると、前掛が一宮町で、手甲が中道町、八代町、豊富村で、脚絆が豊富村と石和町で記述されている。いずれも汚れの防止や、身体保護のための被服であり、仕事の内容により使用の有無が左右されたものと思われる。また、防寒用として、石和町、御坂町で綿入れハンテン、一宮町で綿入れ長着が、雨具として御坂町、八代町、芦川村でミノ(ケデー、ケデイ)の記述がある。袖の形は石和町、八代町で筒袖、芦川村で筒袖、ヒネリ袖、襦袢はスポン、一宮町で襦袢の袖は鯉袖口との記述があり、いずれも筒型の袖である。

女子の場合、一宮町、豊富村、石和町、八代町では一部式の長着(多くの場合筒袖)の裾を端折った着装に袴、前掛け、手甲やウデヌキ、ハバキ、下着は腰巻という完全な一部式の服装であった。これが、芦川村で長着からハンギモン・カラサンという二部式に変化、御坂町でもカラサンが着用された。中道町では明治時代にモンベが着用されたとあるが、モンベが山袴の総称として用いられたのは第二時大戦中からのことであるため、ここでのモンベは山袴の一種と考えられる。このように二部式への変化は御坂町、芦川村、中道町で他の地域より早かったのではないかと推察される。この後、昭和初頭には国策により奨励された短衣の二部式作業服を着用することとなった。

山梨県で女子の服装が二部式へと変化するきっかけとなったのは、カラサンの導入である。石和町誌には、カラサンは昭和10年ころ着用されるようになり、長野県から入り岐阜地方に早く広まり、次第に全県下に普及したとある⁹⁾。また、山梨県総合郷土研究にも、明治以前、長野県より入り、北巨摩郡でタツケという名称で用いられたとある⁹⁾。一方、芦川村誌には、カラサンは山仕事の多い芦川の特徴であり、明治になり芦川の人が発明したものであると伝えられているとある⁹⁾。さらに、上芦川にきていた西八代郡の桶屋がはいいたものをまねて作ったともいわれ¹¹⁾、山梨県の特徴ともいわれるカラサンがどのような経路で県下

表3 一宮町の仕事着・平常着

市町村名	一宮町							
時代	明治初年				その後		大正以後	昭和初頭以後
着用目的	平常着				仕事着		仕事着	仕事着
着用者	男		女		男		男	女
季節・気候	夏	冬	夏	冬				
被服の名称	長着 角帯 前掛	綿入れ長着 角帯 半纏 前掛	長着 腹合帯 前掛	綿入れ長着 腹合帯 半纏 前掛	長着または襦袢 股引	シャツ 股引	シャツ ズボン	作業服 タスキ エプロン
雨具・防寒具								
袖	中流家庭では鯉袖口（おすっぽん）を用いた				襦袢の袖は鯉袖口			
被服材料	衿やおすっぽんにはビロード地素木綿、少しよくなって木綿 裏地や下着類も家織木綿（汚れず耐久性有の織色木綿） 紺色系統				シャツは木綿、白地に細い縞入り			家織木綿絆浴衣古物を洗い張りし補う
供給	家で木綿を栽培、製糸、織り、縫製				明治時代までは自給自足、明治24、25年まで木綿栽培盛ん、大正初期には全く無くなり養蚕に変化、綿を購入し織るようになる			明治時代までは自給自足で昭和初頭まで変化なし
かぶり物	サンド笠、ほうかむり						麦藁帽子	手ぬぐい、麦藁帽子
履物	足袋、草履がけ						地下足袋	古足袋、靴下・藁草履
特徴 ・変化の様子	前掛は幅広 平常着には明治時代より着用が許された羽織より、布の少ない縫製も楽な半纏が主であった。半纏は丈長としよい糸で作り、外出用羽織代用とされた着物や半纏は黒や紺の掛衿付き				長着は古いもの 股引は「フンゴミ」			戦争を期に作業服が規格として登場した 女子青年団員から始まり年女子も使用する
洋装化					男子の洋服流行は昭和より			
図表の有無					フンゴミ（股引）			

に普及したか興味深い。

女子の袖については、御坂町で襦袢の袖は鯉袖口（おすっぽん）、八代町で筒袖、芦川村で筒袖、ヒネリ袖、襦袢はスッポンの記述がある。防汚、身体保護のための被服としては女子の場合、前述のように、襷、前掛け、手甲やウデヌキ、ハバキが用いられた。なかでも、ハバキは女子のカラサン着用が普及するまで、股引と脚絆着用の男子には用いられない女子特有のものであったと考えられる。防寒具、雨具としては、一宮町で綿入れ、八代町で着ござが記述されている。

(2) 平常着

男子の平常着は、石和町、御坂町、一宮町、八代町では長着と兵児帯または角帯と一部式の服装

であった。ただ、八代町の場合外出作業時は股引を着用した。一方、中道町では襦袢と股引、芦川村では長着とカラサンといずれも二部式であり、仕事着と同様の服装で平常もすごしたとされる。下着としてはふんどし、八代町で襦袢が、夏は単衣長着、防寒のためには、衿長着、や綿入れ長着、絆纏、が用いられた。

女子の場合、石和町、御坂町、一宮町、八代町、中道町で長着、帯（多くは腹合帯）、前掛という一部式の服装であった。二部式であったのは芦川村のみで、長着とカラサンが用いられた。下着としては、一般に腰巻が、八代町では襦袢が用いられた。男子と同様、夏は単衣長着、防寒のためには、衿長着、綿入れ長着、絆纏が用いられた。芦川村では綿入れは長着の場合、ノノコ、絆纏の場合ノ

表4 八代町の仕事着・平常着

市町村名	八代町						
時代	明治時代 [※]		昭和12年頃から	明治時代			
着用目的	仕事着		仕事着	平常着			
着用者	男	女	女	男		女	
季節・気候				冬	夏	冬	夏
被服の名称	筒袖（長着 [※] ） 股引 帯 [※] 褌（袖がある時） 手甲	裾袢 筒袖・長袖（長着 [※] ） 腰巻 帯 [※] 褌（袖がある時） 手甲・腕ぬき 前掛（並幅二尺位） 巾脛（はばき）	標準服	綿入長袖（長着 [※] ） 裾袢（黒・紺の掛襟付き） もっこふんどし・六尺ふんどし 股引（外出・作業時） 角帯	単衣（長着 [※] ） もっこふんどし・六尺ふんどし 股引（外出・作業時） 角帯	綿入長袖（長着 [※] ） 裾袢（黒・紺の掛襟付き） 腰巻（ゆもじ） 腹合帯 前掛	単衣 裾袢（黒・紺の掛襟付き） 腰巻（ゆもじ） 腹合帯 前掛
雨具・防寒具	ミノ（ケデー、本物は木の皮、シュロの毛やわら作りが多い）	着ゴザ （ゴザを2つ折りにし紐をつけた）		半天（掛襟付き）		半天（掛襟付き）	
袖				上流では鯉袖口（おすっぽん）			
被服材料				綿木綿			
供給	平常着の着古し（家織）			家織			
かぶり物	ほうかぶり・鉢巻き 菅笠（降雨・暑い時）	手拭 菅笠（降雨・暑い時）					
履物	糸で細かくさした足袋 草履	足袋 草履					
髪型							
特徴・変化の様子	腕ぬきをつけることもある 大正のはじめ頃「わらじがけ」普及 草履→はだし足袋→ゴム短靴→地下足袋 菅笠→麦藁帽子 ミノ→油紙・ゴザ→ビニール製合羽 裾はジンジンハシオリに引っかかる	終戦後菅笠→麦藁帽子 昭和30年頃まで着ゴザ→合羽 片つまを帯に挟む・両つまを帯に挟む（桶端折）	中年以上はもんべ使用が多い	明治27・8年ころ兵児帯流行 シャツ着用開始			
洋装化				洋装一官庁の仕官、学校の教師 軍人			
図表の有無	仕事着装写真・雪靴	仕事着装写真・雪靴		モモヒキ（フンゴミ）、半モモヒキ			

注）[※]印は著者記入

表5 芦川村の仕事着・平常着・外出着

市町村名	芦川村						
時代	大正～昭和20年代						
着用目的	仕事着(ヤマギ・ノラギ)		外出着(村外)	外出着(祭り・正月)	平常着		
着用者	男	女			男女		
季節・気候					冬	春・秋	夏
被服の名称	ハンギモノ カラサン 襦袢 フンドシ	長着 襦袢 腰巻 ハバキ ウデヌキ	ハンギモノ カラサン		チョイチョイギ* チョクツカギ*	袷着物 羽織 カラサン	袷着物 カラサン 単衣着物 浴衣 カラサン
雨具・防寒具	ケダイ(蓑)					ノノコ(綿入れ着物) ハンテン ノノコパンテン チャンチャンコ 袷のハンテン	
袖	筒袖、ヒネリ袖						
被服材料			一目縞・棒縞 メリンズ・銘仙	木綿 大正紷		縞柄木綿、紷 袷ハンテン―紷の木綿 家織の袖	
供給	おろしたては外出着→普段着→仕事着 明治・大正時代、綿糸を購入し「ウチオリ(家織)」とした 昭和初期～昭和30年には甲府、上九一色、八代、石和からの呉服行商人(背負い、馬)から購入 明治～昭和には養蚕がおこなわれ、戦後しばらくウチオリの絹はヨソイキ着、羽織、ハンテン等を使用						
かぶり物	手拭(ホツ カムリ)	手拭(ネエサンカブリ)					
	明治末まで菅笠(雨具)						
履物	ワラジ・ワラジガケ(ワラジに足袋底 と足袋を縫い付けた物)、ワラグツ、 カンジキ					ワラゾウリ 大正9年ゴム靴が売り出される	
髪型	男は三分刈り、坊主、娘はハイカラ、年配女子はヒクネリ(ひつつめた髪の毛を後でひねってまげを作る)						
特徴 ・変化の様子		裾端折りを腰で縛る、脛 保護のためハバキ着用				くつろぐときは長着物着用 袷ハンテンは女性のおよばれ時羽織の代用 昭和16、17年頃カラサン→モンペ	
	ハンギモノ―羽織丈の短い着物 襦袢+スッポン(肘から手首までを 毛糸で編む) 雪山では毛皮(尻につるす)も使用さ れた 近年では麦藁帽子 大正時代末にワラジガケ→地下足袋 昭和―ワラグツ→ゴム長靴						
洋装化						戦後洋服を着るようになりカラサンは急に 廃れる	
図表の有無	カラサン・ハンギモノ・ツツポ・手 甲・ミノ						

注) *印は被服の名称ではなく、外出着の呼称

ノコハンテンと呼ばれ、防寒用の袷ハンテンやチャンチャンコもあった。石和町でも綿入れをノノコ、ヌノコ、スノコと呼び、チャンチャンコやおおい袴も利用された。

平常着は、多くは男女ともに一部式の長着であり、気候の変化に対して、単衣、袷、綿入れと変化するにより適応していた。

(3) 被服材料とその供給

被服材料は各町村ともに、自家製の家織(ウチオリ)の木綿である。家織木綿の多くは紺色系の縞模様であった。この家織はおろしたては外出着、その後日常着、仕事着として着用された。一宮町や中道町では、綿を栽培し、製糸、織り、縫

表 6 中道町・豊富村の仕事着・平常着

市町村名	中道町		豊富村		
時代	明治時代		以前		
着用途	仕事着・平常着		平常着		仕事着
着用者	男	女	男	女	男
季節・気候					
被服の名称	襦袢 股引 手甲	着物(野良着) たすき もんぺ 前掛 手甲	縞着物 袴天 兵庫帯	筒袖きもの 袴天 帯	シャツ 尻切半天 股引 手甲 脚絆
雨具・防寒具					
袖					
被服材料					
供給	自家用の木綿を栽培、反物に織り、明治末期には家内工業として進歩 養蚕が盛んになると絹織物を織り自家製とした				
かぶり物	すげ笠		手拭・笠・麦藁帽子・中折れ・山高・鳥打ち・一文字(夏)		
履物	わらじ	藁・竹の皮製ぞうり	黒足袋 桐下駄・表付下駄	日和下駄	わらじ わら草履
髪型			丸刈り・角刈り 7・3分け	束髪	
特徴・変化の様子	その後男一襦袢→シャツ 昭和年代には男は股引・シャツ、女は着物・モンペを着用				現代では 作業衣・軍手 ゴム手袋・地下足袋 へと変化
洋装化					
図表の有無					

製とすべてを自家生産でまかなった。御坂町や芦川村では、綿糸を購入し紺屋にだして染色、織り、縫製し、自家製とした。一宮町では明治時代、養蚕が盛んになると綿糸を購入するようになり、御坂町、中道町でも養蚕が盛んになると家織の絹を用いるようになるなどの変化はあったが、このような衣生活の自給自足は、呉服行商人から購入するようになる(芦川村誌)、あるいは衣服の購入による消費生活が行なわれるようになる(御坂村誌)昭和初期まで続いた。

(4) かぶり物・履物

仕事時のかぶり物は、いずれの地域でも手拭で、かぶりかたは男子のハチマキやホッカマリ、女子のアネサンカブリがある。防雨、防暑のためには菅笠が用いられたが、その後麦藁帽子が用いられた。豊富村建村百年には中折れ、山高など男子用の帽子が記述されている¹⁰⁾。

仕事時の履物は石和町ではワラジ、御坂町、一宮町、八代町では足袋と草履が用いられた。なかでも八代町の足袋は、糸で細かくさしたものであり、東北地方で見られるサシコが用いられなかったと考えられるこの地方では、このように糸をさしたという記述は足袋のみであった。芦川村、中道町、豊富村ではワラジが用いられた。芦川村と大正初期に八代町で用いられたワラジガケは、ワラジに足袋底と足袋を縫い付けたものである。また、雪の時は、御坂町、八代町、芦川村で藁製のユキグツがはかれ、芦川村ではカンジキも利用された。大正時代になると仕事用のはきものは地下足袋となり、昭和初頭には、雪用のくつはゴム長靴へと変化した。

(5) 洋装化

多くの町村誌が、明治から大正の衣生活についてのべているが、この中で洋装化については石和

町で昭和10年ころに野良着が洋装化、昭和に入り男子の洋服が一般化、昭和四年に女子のセーラー服着用があり、御坂町で、大正時代に児童の多くが洋服、一宮町で男子の洋服流行は昭和よりの記述がある。また、八代町で明治時代に官庁の仕官や学校の教師、軍人が洋装との記述されている。ただし、男子の仕事着は大正から昭和にかけて、シャツと股引の服装が一般化しており、男子の洋装化は女子と比較してかなり早く進んだと推察される。

(6) 東八代郡で用いられた主な被服

東八代郡で用いられた主な被服や防汚、防寒具は次のとおりである。

1) ナガギ (長着)

身丈が対丈の着物のことで、布地は縞か紺無地の木綿が多く用いられ、単衣、袷、綿入れ等の仕立てがある¹²⁾。

2) ハンテン (絆纏)

江戸時代後期になって出現したもので、形態上からは羽織に近いが、襟はおれず、前身頃の左右を結ぶ紐がない。襟は襦袢のような通し襟で、掛け衿をするのが特徴である。防寒用のものは袷か綿入れで、布地はほとんどが木綿である¹²⁾。本調査の結果ではハンテン (絆纏) は半天、半纏、絆天と記述がさまざまであるが、すべて同じ被服である。

3) ジュバン (襦袢)

襦袢は本来、和服用肌着のことであり¹³⁾半襦袢は丈の短いものを長襦袢は丈の長いものをさす。本調査の男子用の襦袢は、二部式仕事着の上着のことで、別名山襦袢、野良襦袢といわれる。

4) モモヒキ (股引)

下衣服の一種であり、ふくらはぎに曲線・裁ちのまちを入れて足びつたり仕立て、反対に腰にはたっぷりとしたまちで、ゆとりをもたせ、左右別々に仕立てたものを一本のひもでつないだもの¹³⁾。

5) フンゴミ

地方農山村などで、仕事着、日常着として着用される袴 (山袴) の一種である。江

戸時代の野袴の裾がきわめて細いものをさすともいわれるが¹²⁾、山袴は種類も多く、その呼称の分類はきわめて難しい。

6) カラサン

フンゴミと同様の山袴の一種である。カルサン、カリサンとも呼ばれ山袴の内でも袴を構成する前布と後布の内、後布が長大である場合カルサンと分類する説¹²⁾と後布と前布が同じであるものをカルサンとする説¹⁴⁾がある。少なくとも、フンゴミより脚部にゆとりのある山袴である。

7) タスキ (褌)

着物の袖をからげて、手の運動を自由にするために用いる紐¹²⁾

8) マエカケ (前掛)

衣服の汚れを防ぐために下体の表に着装する。一般には一巾の布にくけ紐、組紐を付けて作る¹²⁾。

9) テコウ (手甲)

手首から手の甲を保護するもので、肘から甲までを被う長いものと、手首から甲を被うもの、その中間のものなど種々ある。甲の部分が必ず三角形または半円形をなしている¹³⁾。

10) ウデヌキ (腕貫)

二の腕に着装するもので、手腕の活動を軽快にし、装飾とも保護ともなる。合わせ型のものは腕に巻いて紐またはコハゼでとめ、筒形のものは腕を通して一本の紐でくびからつる¹²⁾。

11) ハバキ (脛巾)

足の脛部を保護し、足の活動を容易にするために用いる。がま、いぐさ、稲わらなどの植物の茎や葉を使い、四角形あるいは扇形に編んで、上下に紐をつけて脛に巻き付けるものである。東北地方では、がま、わら製のものを脛巾といい、布製のものを脚絆と呼んでいる¹³⁾。

12) キャハン (脚絆)

脛部に着装するもののうち布製のもの。

13) ケダイ (ケデー)

藁藁の総称で、山梨県から長野県の一部、秩父地方、群馬県吾妻郡、佐波郡にまである語¹⁴⁾。

4 おわりに

本ノートでは山梨県の民俗関係資料を基にした、山梨県東八代郡の明治期から昭和初頭までの仕事着、日常着を中心とする衣生活についての調査結果を報告した。郷土の衣生活資料を活用するための資料整理の方法として、調査票への記入を行い、東八代郡の各町村の衣生活の相違や、変化、衣生活の在り方についてまとめるとともに、用いられた被服について説明を加えた。ただし、かぶり物や履物についての説明は未収であること、用いられていたハンギモン、オスッポン、ノノコについてはその説明が十分になされなかったこと等、不足の点も多い。山梨県の明治期から昭和初頭の衣生活については、さらに、他の地域の衣生活の調査とともに、他の民俗資料による本調査結果の検討が今後の課題として残された。

調査資料の収集に当たり、本学生活科学科衣生活分野の学生諸姉の協力を得た。ここに感謝の意を表する次第である。

引用文献

- 1) 山梨県教育委員会(1964): 山梨県民俗資料調査報告書 山梨県教育委員会

- 2) 山梨県教育委員会(1985): 山梨県民俗地図—山梨県民俗文化財分布調査報告書— 山梨県教育委員会
- 3) 山梨県女子師範学校(1978): 山梨県総合郷土研究 名著出版
- 4) 東洋大学民俗研究会(1984): 右左口の民俗 中道町教育委員会
- 5) 石和町誌編さん委員会(1991): 石和町誌 第二巻 石和町
- 6) 御坂町誌編集委員(1971): 御坂町誌 御坂町
- 7) 一宮町誌編さん委員会(1967): 一宮町誌 一宮町
- 8) 中道町誌編纂委員会(1975): 中道町誌 上 中道町役場
- 9) 山梨日日新聞社(1992): 芦川村誌(下巻) 芦川村村誌編纂委員会
- 10) 豊富村建村百年編纂委員会(1974): 豊富村建村百年 豊富村建村百年祭実行委員会
- 11) 神奈川大学日本常民文化研究所(1987): 神奈川大学日本常民文化研究所調査報告書第12集 仕事着—西日本編— 平凡社
- 12) 宮本太郎(1968): かぶりもの・きもの・はきもの 岩崎美術社
- 13) 日本風俗史学会(1979): 日本風俗史事典 弘文堂
- 14) 財団法人日本民俗学研究所編(1955): 総合日本民俗語彙第二巻 平凡社

(1996年1月9日受理)